

陳友諒の「大漢」國について

谷 口 規 矩 雄

陳友諒が元末群雄中の最強の一人であり、「大漢」國を建てて朱元璋と覇を競ったことはよく知られた事實である。朱元璋が天下統一事業の過程で最も危険視したのは、この陳友諒の活動であった。彼は沔陽の漁夫の子から身を起こし、短時日の内に揚子江中流域に一大勢力を築き上げたのであったが、朱元璋との角逐に破れ、また短時日の中に勢力を失ってしまった。こうした彼の活動を支えた勢力は如何なるものであったのだろうか。また彼の支配領域は、朱元璋に數倍する廣さを持ち、軍事力の面でも朱を凌ぐ力量を持っていたと考えられるのだが、それらを有効に組織しえず、結局朱元璋に敗北してしまわざるを得なかった「大漢」國の限界は何に起因していたのであろうか。本稿では以上のような點を中心に、元末史における陳友諒の活動について若干の検討を加えてみたいと思う。

一

陳友諒の活動を考える場合、當初は彼自身もその一員であった徐壽輝集團^①の活動について語らないわけにはゆかない。そこで先ず、徐の「天完國」の活動から論を進めることにする。

徐壽輝が「天完國」を建設するに至った経緯については、明實錄卷八、庚子（至正二十年）閏五月戊午の條に、彭瑩玉、周子旺等の起事の失敗を述べたのに續けて、

麻城人鄒普勝。復以其術鼓妖言。謂彌勒佛下生。當爲世主。遂起兵爲亂。以壽輝相貌異衆。乃推以爲主。舉紅巾爲號。

……壽輝僭稱皇帝。國號天完。改元治平。據斬水爲都。以普勝爲太師。

と述べられている。この記事は徐壽輝の舉兵、即ちいわゆる西系紅巾軍の蜂起を述べたものとしてしばしば引用される有名なもので、ここに改めて解説する必要もないであろう。ただここで指摘しておきたいのは、「天完國」の建國に當つて、その實質的力となつたのは鄒普勝であつて、彼は妖僧彭瑩玉^②の直系の弟子であり、天完國の最も樞要の地位にあつたということである。

所で徐壽輝等が至正十一年（二三五一）八月に蜂起して以後、その天完國の丞相倪文俊が部下の陳友諒に殺害される至正十七年（二三五七）九月までの間、徐壽輝集團の活動には一つの特徴的な事實が看取されるのである。明實錄卷八、前記の同條によれば

壬辰（至正十二年）正月。遣其僞將丁普郎、徐明達。陷漢陽・興國（湖北省陽新縣）。普勝陷武昌。曾法興陷安陸（祥鍾縣）。又陷沔陽及中興路（江陵縣）。二月。陷江州（江西省九江縣）。南康路（星子縣）。分兵陷岳州（湖南省岳陽縣）。房州（湖北省房縣）。歸州（秭歸縣）。三月。遣歐普祥陷袁州（江西省宜春縣）。陶九陷瑞州（高安縣）。項普瑞陷饒州（鄱陽縣）。徽州（歙縣）。信州（上饒縣）。閏三月。遣陳普文陷吉安（江西省吉安縣）。……歲癸巳（至正十三年）元兵既復其所陷諸州路。十月。進兵討壽輝於斬水。大破獲僞官四百餘人。復武昌・漢陽諸路。壽輝遁去。乙未（至正十五年）五月。壽輝僞將倪文俊。復陷沔陽・中興路。七月。復陷武昌・漢陽。遂圍岳州。丙申（至正十六年）正月。倪文俊建僞都於漢陽。迎壽輝居之。……丁酉（至正十七年）二月。倪文俊陷峽州（湖北省宜昌縣）。破鹿盧關。明玉珍又進陷州（川）蜀諸郡。因據守之。

と記されている。この文によれば、至正十三年頃までの徐壽輝集團の活動の過程においては、鄒普勝と並んで、丁普郎、歐普祥、項普瑞、陳普文といった、名前に「普」字の附いた人物が大いに活躍しているのが目立つ。また丁度同じ時、別將の趙普勝も池州（安徽省貴池縣）・太平（當塗縣）等の各地を陥れていた。そしてこれら名前に「普」字のついた人物の事蹟を検討するならば、彼等が白蓮教徒であつたことが相當明白に推察できるのである。前記の人物中、最も有名なのが歐

普祥である。明實錄卷十五、甲辰（至正二十四年）六月丁巳の條によれば

（歐）普祥黃州黃崗（岡）人。歲辛卯（至正十一年）。從徐壽輝。以燒香起兵爲元帥。人稱爲歐道人。

とある。歐普祥は又の名を歐祥といい、起兵當初から壽輝に従い、天完國の有力者として活躍した。「燒香を以って兵を起した」とされる點、また「歐道人」と稱されていることから、彼が白蓮教徒であることは間違いない。そして至正十三年十二月、江西の袁州府（宜春縣）を陥れ、ここを本據としてからは吉安や瑞州（高安縣）等各地を攻略し袁國公と稱されるに至った。

所でこの袁州こそは、いわば徐壽輝集團發祥の地とも言うべき場所で、彼等の祖師とも言うべき彭瑩玉や、その弟子周子旺等の活動の根據地であつた。従つてこの地に據つて活動した歐普祥は、恐らく彭瑩玉等の後を繼ぐ者として、徐壽輝集團では重要な位置を占めたにちがいない。

次にとり上げたのは項普略（瑞）^④である。彼に關しては元史卷四十二、順帝本紀、至正十二年三月甲子の條に、徐壽輝僞將項普略。陷饒州路。遂陷徽州・信州。

とあり、また同年秋七月庚辰の條には

饒（州）・徽（州）賊犯昱嶺關。陷杭州路。

とあり、項普略は至正十二年七月、杭州をも陥れたのである。

所で輟耕錄卷二十八、「刑賞失宜」という條には

至正十二年。歲壬辰秋。斬黃徐壽輝賊黨。攻破昱嶺關。徑抵餘杭縣。七月初十日。入杭州城。僞帥項蔡、楊蘇。一屯明慶寺。一屯北關門妙行寺。稱彌勒佛出世以惑衆。……其賊不殺不淫。招民投附者。署姓名于簿籍。府庫金帛。悉輦以去。という記述がある。前にあげた元史順帝本紀の記事から判斷して、ここに言う「僞帥項蔡」は、恐らく項普略とみなして間違いないと思われる。とすれば、「彌勒佛の出世を稱えて、以つて衆を惑」わすという行動を取っていることからして、

白蓮教徒であることは明白であろう。それに「不殺不淫」という紀律ある行動を取っている點、また自集團への参加者の名簿を作製しようとしている點から判斷すれば、統制ある組織的活動を指向していたとも考えられる。しかし彼はこの後間もなく元軍によって殺されたと考えられる。

以上にあげた二、三の例からも推察されるように、徐壽輝集團にあつては、名前に「普」字のつけられた人物が白蓮教徒であることはまず間違いないところであろう。そして地方志の記録等によって見れば、そうした人物の例は更に數が増加する。崇禎瑞州府志卷二十四、祥異志には

元至正十一年。是歲紅巾盜起。十二年三月。紅巾況普。天燔郡城。火三日不絕。公私蕩然。十四年。天完將李普。成、王普。敬。據華林山。以寇本路。十九年春三月。劉普燔掠上高縣甚慘。

と記されており、また同治南康府志卷十一武備、武事の條には

至正十二年。蘄黃寇由九江。水陸並至。攻圍龍興（南昌縣）。……十三年。紅巾寇史普。清。率衆走據雲居山爲巢穴。

と記されている。また安徽南部の徽州府でも、前にあげた項普略とその弟子と考えられる項奴兒等が活動していたし、さらに湖北の蘄州方面では魯普泰^⑦という人物が活動していたことがわかつてゐる。もとより、こうした「普」字のついた人物のみが白蓮教徒とは斷定できないので、最初に上げた明實錄の記事中に見出される徐明達、曾法興、陶九等も白蓮教徒として活動していたに違ひない。それにしても江西と安徽南部では、名前に「普」字のついた人物の活動が目立つことは事實である。

ところで、湖北、江西と並んで徐壽輝集團の活動が最も激しかった湖南地方は如何なる狀況であつたろうか。

嘉靖長沙府志卷一、沿革の條によれば

至正（間）。僞漢將陳友才據潭州（長沙縣）。又歐祥據瀏陽、攸縣、茶陵。劉貴清據益陽。易華據湘鄉。民入山寨立長。比衆自保。

と述べられている。これが至正年間の何時の情況かは明確ではないが、この文に言う歐祥は前述の歐普祥に違いない。とすれば歐普祥が江西の袁州を陥れたのは至正十三年十二月のことであるから、徐壽輝集團の舉兵後、即ち至正十一年八月以後、十三年十二月までの時期のこととなる。この文は、恐らく徐氏集團舉兵後のごく初期の、長沙を中心とした湖南方面の情況を述べたものと解してよいだろう。但しここでは一方また「僞漢の將」と漢の國號が使用されている。陳友諒が「漢」國を建てたのはもっと後で、至正二十年（一三六〇）のことであるから、その點からすれば、この文を徐氏集團舉兵直後の記事と見なすことは矛盾することになるが、それは後世の人が當時の事實を記すのに不正確な表現を用いたものと解しておけばよいであろう。従つて至正十三年當時にはまだ「漢」國が存在していなかったのは當然である。

以上のように見てくるならば湖南地方も、その大部分は至正十三年頃には徐壽輝集團の勢力下に入っていたといえよう。しかしこの年の末頃から態勢を建て直した元軍側の反攻が開始され、事態は大きく變化していった。

二

反撃に轉じた元軍は至正十三年十月、徐壽輝を蘄水に破り、引續いて武昌、漢陽の各地を奪回していった。これを機に湖南、江西各地でも元軍の反攻が強化され、徐氏集團の力は急速に後退するかと思われた。しかしこの趨勢を挽回させる力の中心となつたのが倪文俊の活動であつた。彼は至正十五年五月、沔陽を攻陥させたのを皮切りに、七月には武昌、漢陽を再度元軍より奪い返し、翌至正十六年正月には漢陽に建都して、ここに徐壽輝を迎えた。倪文俊が徐氏集團の宰相となつたのは何時の事か定かではないが、ここに至つて彼が徐氏集團内の最強の権力者となつたことはほぼ間違いない。

所で彼のこうした活動を支えたのは強力な水軍の力であつた。これもよく知られた史料であるが、草木子卷三、克謹篇に

沔陽盜倪文俊。號蠻子。聚衆從爲亂。倪世以漁業居黃州黃陂。其生之夕。母夢有白虎入室。遂生。及徐（壽輝）僭號。

倪爲僞相。用多槳船。疾如風。晝夜兼行湖江。出人不意。故多克捷。所至殺害。擄威順王諸子。妻其妃子。……荆・鄂（武昌縣）・潭・岳（岳陽縣）・黃・蘄・澧（湖南省澧縣）・六（安徽省六安縣）・常德（湖南省常德縣）・寶慶（邵陽縣）・江（江西省九江縣）・虔（贛縣）・洪（南昌縣）・吉（吉安縣）等州。皆爲所據。然驕恣不撫其下。後竟爲其下所殺。……其弟倪文郁同亂。後封長沙王。鎮岳州。及蠻子誅。文郁亦見殺。

とあり、彼はもと湖北の黃州黃陂縣の漁夫の出身であつた。彼は長江、洞庭湖一帶の水域を活動の場とする水賊、ないしは漁師集團——恐らくこの兩者の平時における生活態様は明白には區別し難いものであつたろう——を率い、その頭目として活躍していたと考えられる。ここに「多槳船を用い」て風の如く江、湖を疾航したというのは、そのことを物語っている。この「多槳船」というのは、例えば武備志卷百十七、軍資乘、戰船二に「八槳船」というのが記載されている。「八槳」であるから、この船は兩側に四丁づつの櫓、合計八丁の櫓を持つ一種の快速船であらうと想像される。本文には「八槳船は、但だ哨探之用に供す可し。賊を撃つこと能わず」と記されているが、倪文俊はこのような「八槳船」を戰鬪用として改良した快速の「多槳船」團を率いて各地の元軍を打破り、徐壽輝集團内で絶大な權力を握ることになったものと解される。

こうして倪は更に強大な權力を握ろうとして、至正十七年九月、集團の主、壽輝を漢陽に攻撃したのであつたが、それに失敗し、黃州に走つた所を、逆に部下の將陳友諒に襲殺されてしまつたのである。

以上のように見てくると、倪文俊の活動からは白蓮教徒的行動を看取することが全く不可能であるのみならず、元史、成遵傳（卷一八六）によれば、至正十六年、彼が威順王、寬徹普化の軍を漢川縣に打破り、その王子達を捕虜にしたとき、王子達を人質にして、元朝に「湖廣行省平章」の地位を要求しているのである。倪の行動には反體制という面からみても全く一貫性がなく、自己の權勢の擴張のみを狙う盜賊的性格が、そこからは強く浮び上がってくる。自己の集團の統制も不十分であつたという草木子の記事も、そのような盜賊集團的無紀律性の現れであらう。

徐壽輝集團を構成した勢力の中には、倪のような水賊的存在とは別個に、地方の土豪的勢力の存在も指摘することができる。一例として李明道をあげる。

(李) 明道豊城(江西省)人。家富於貲。乘亂起兵。附徐壽輝。後附陳友諒。(明實錄卷十四、甲辰二月癸丑)

彼の場合は地方の富裕な土豪層の一人として、自身の勢力の保持の爲に徐氏集團に加わったものと解される。徐氏集團と元軍の間に激しい攻防戦が展開された江西では、何れの陣營にも屬さず、独自の勢力を保持することは殆んど不可能なことであったろう。

以上のように見てくるならば、白蓮教團としての徐壽輝集團は、教團勢力を中核としながらも、内部的には倪文俊集團に代表されるような盜賊的集團、あるいは李明道にみられるような土豪的勢力が、様々な強弱の程度を持って結合し合っていたものと解することができよう。そして前節で指摘したように、彌勒佛の下生を稱え、「不殺、不淫」という紀律ある態度をもって行動した項普略に代表されるような集團、即ち名前に「普」字を冠した人物達によって率いられた集團の活動が、最も活發に展開されたのが、江西と安徽南部地域であったということができであろう。

三

以上の二節においては、陳友諒が權力を握る以前の徐壽輝集團の活動狀況、及び集團の構成勢力等について述べた。本節では、陳友諒がどのような様で徐氏集團を掌握し、「大漢」國を建てるに至ったのか、その大漢國の構成には如何なる問題があったのか等について論じたい。

至正十七年(一三五七)九月、倪文俊を倒した陳友諒は倪の部衆を併呑し、自ら「平章」を稱えて自立するに至った。そしてその後の彼の勢力の伸張は著しく、湖北、湖南を押え、江西諸郡を攻破し、福建省境郷をも侵すほどになったのである。

所で陳友諒が沔陽玉沙縣の漁夫の出身であり、若い頃は縣の小吏となっていたが、性に合わず、徐壽輝の起亂とともにそれに投じ、その將倪文俊の書記役となったことは、よく知られた事實である。彼が倪文俊の部下となったのは、恐らく彼も倪と同じく漁夫の出であったことと無關係ではないであらう。そして倪の下で水軍を率い頭角を現わすに至ったものと思われる。そして倪の勢力、即ちその水軍を併せることにより、陳友諒は徐氏集團における最強の勢力にのし上って行ったのであった。その後の朱元璋との戦においても、陳友諒の主力は強力な水軍であった。陳友諒の勢力の基礎はこの水軍にあったといつてよいであらう。

さて、倪を倒して自立的勢力となった陳友諒は、翌至正十八年正月、部下の將、趙普勝、祝宗等を率いて安慶（安徽省懷寧縣）を陥れ、さらに池州（貴池縣）をも破った。また康泰、趙琮、邵克明等を分遣して邵武（福建省）、吉安等の地を攻め取り、九月には辛文才を遣して贛州を攻陥させた。一方、別將を派して襄陽をも攻取させている。そして至正十九年十二月、江州（江西省九江縣）に移つて來た徐壽輝の兵力を潰して孤立させ、陳自ら江州を都として「漢王」を稱えるに至つた。さらに翌至正二十年（一二三〇）閏五月、朱元璋軍の守る太平（安徽省當塗縣）を攻撃する間、采石磯において「天完國」主徐壽輝を殺害し、自ら「大漢國」皇帝を稱えたのである。

以上が陳友諒が「大漢國」を建國するに至つた経緯であるが、ではこの漢國はどの様な形をもつて構成されていたのであらうか。明實錄卷八、庚子（至正二十年）閏五月戊午の條に、陳友諒が壽輝を殺し、國號を漢と定め、大義と改元したことを述べた後に、

以鄒普勝爲太師。張必先爲丞相。張定邊爲太尉。

と記されている。鄒普勝、張必先、張定邊の三人が陳友諒の漢國を支える最も樞要な地位にあったことは明らかである。それならば、徐壽輝を殺害した陳友諒は、徐氏集團の勢力を如何なる形で引繼いだのであらうか。別な言い方をするなら、漢國の中樞を形成することになった上記の三人は、徐氏集團にあっては如何なる勢力を代表していたのであらうか。

鄒普勝が徐氏集團における起兵當初よりの有力な白蓮教徒であったことは、第一節で述べた通りである。ということは彼を漢國の中心的メンバーに加えることによって、陳友諒は徐氏集團の白蓮教徒勢力を漢國の中に取込もうとしたものと考えることができよう。

では他の二人は如何であろうか。草木子卷三、克謹篇に次のような記事がある。

其後天下處處盜起。陝西有金花娘子。江西有歐道人。山東有田豐。襄陽有莽張。岳州有潑張。安慶有雙刀趙。四川有旻眼子。各據州郡。此其大者。

これが何時頃の事情を述べたものかはっきりしないのであるが、恐らく陳友諒が自立する前後の頃の場合と考えておきたい。所でこの記事では、長江中流域の有力勢力として江西の歐道人、即ち歐普祥、岳州の潑張、安慶の雙刀趙があげられている。ここに言う「潑張」は張必先のことで、「驍勇善戰」をもつて聞えた人物であった。彼は漢國の滅ぶまで岳州を守り、陳友諒に最も忠實な人物であった。張定邊については具體的なことは全くわからないのであるが、陳友諒亡き後も、子の陳理をより立てて、最後まで朱元璋に抵抗しようとした點から考えて、友諒の最も忠實な部將の一人であったといつてよい。

所で、鄒普勝を太師とした陳友諒は、それならば残された白蓮教徒の勢力を自己の支配下に組み込むことができたのであろうか。そこでまず上にあげた安慶の「雙刀趙」と陳との關係を考えたい。雙刀趙というのは趙普勝のことであるが、彼については明實錄卷五、丁酉（至正十七年）五月丙申の條に

趙普勝者。本巢湖水軍元帥。初與俞通海等皆來降。中道叛去。降於壽輝。爲人驍勇。善用雙刀。人號爲雙刀趙云。

と述べられており、もと巢湖の水軍の有力者の一人であった。従つて彼も巢湖を生活の場とする漁夫の出身であると見なすことができよう。しかも國初群雄事略に引かれた俞本の記事録によれば、

至正十二年。雙刀趙據含山（安徽省）。聚衆結水寨。稱彭祖家。

と述べられている。ここにいう「彭祖」とは、彭瑩玉が「彭祖師」^⑨と呼ばれていたことから判断して彭瑩玉に違いないと思われる。とするならば、趙普勝は、その名に普字の附いていることからしても彭瑩玉直系の白蓮教徒の一人であったことになり、彼が徐壽輝に従ったのも極く當然のことと考えられるのである。そして彼は安慶を據點として活動し、徐氏集團の勢力を長江下流域へ擴大する上で大きな働きをなしたのであった。

しかし陳友諒が倪文俊を倒し、徐氏集團内で絶對的な力を握り、江西、安徽方面への攻略に乗り出した頃から、趙普勝は陳友諒の部將として行動し始めたようである。そして至正十八年正月には陳友諒軍と連合して元軍より安慶を奪取し、その後も石埭（安徽省）、太平を攻めるなど、朱元璋軍を悩ませた。しかし翌十九年八月に至り、彼は計略にはまって陳友諒に殺されてしまったのである。一つには趙普勝の活躍を嫌った朱元璋が、陳と趙の離間を計り、その策が圖に當って、陳友諒が趙に二心あるを疑がい、彼を殺すに至ったとされている。しかし陳と趙との間にはもっと基本的な對立があったのではなからうか。それは陳友諒が徐氏集團において自身の勢力を確立するためには、彼に對抗し得る可能性を有するような有力勢力をそのまま存続させることが許されたかという問題である。陳友諒にとっては、趙普勝の勢力がこれ以上に大きくなることに大きな危険性を感じていたのではなからうか。しかも趙は前に指摘したように白蓮教徒として、當初から徐壽輝に従った部將であつたとすれば、徐の勢力が後退しつづあるとき、陳友諒が趙普勝を危険な對立勢力と意識することは十分あり得たと解される。従つて陳の方が先手を取つて、この時普勝を殺害し、その勢力を乗取つてしまったのであつた。しかし趙普勝の勢力がそのまますすなりと陳の支配下に入らなかつたことは、後趙の配下の趙志雄が朱元璋に降つて^⑩いることからみて明らかだろ。

次にもう一人の有力者歐普祥と陳友諒との關係を検討してみたい。彼は歐道人と呼ばれ、起兵當初より徐壽輝に従つた有力な白蓮教徒であつたことは第一節において述べた。また袁州を據點として江西各地を攻略し、その功によつて壽輝より袁國公を贈られたことも指摘した。この江西において最有力と考えられる歐普祥は、しかしながら陳友諒の統制を受け

ることを肯じなかったと考えられる。明實錄卷十五、甲辰（至正二十四年）五月丁巳の條の歐普祥の傳によれば

庚子歲（至正二十年）。陳友諒弑壽輝。徵兵於普祥。普祥不聽其節制。

とあり、陳友諒が壽輝を殺害した時、歐普祥より兵を徵發しようとしたが、「その節制を聽か」なかった。そして朱元璋の勢力が江西に進攻するや、この年九月、その子文廣を朱元璋の下に遣わして納款歸附し、元璋より袁國公に封じられて、そのまま袁州を守ったのである。従つて彼は一時的にも陳友諒に對して協力的態度を取ったことはなかったと思われる。

また起兵當初からの徐壽輝の部將の一人、丁普郎^⑨なる人物も、後朱元璋に降り、鄱陽湖における陳軍と朱軍との戦闘では、朱軍の將として戦死をとげているのである。

このように見てくるならば、江西、安徽南部地域の白蓮教勢力は、陳友諒の統制下に十分組み込まれなかった、否、むしろ離反傾向を強めたといつて支障えないのではなからうか。

更にまた白蓮教徒でない勢力も彼から離反、ないし獨立する傾向を強めていたことも見逃せない事實であつた。當初より陳友諒に仕え、後彼の江西行省丞相となつた胡廷瑞^⑩がその一人である。彼は沔陽の出身であるから、恐らく陳友諒の同郷者として彼に従つたものと解せられ、江西行省丞相として重用され、江西の要衝、南昌（龍興）を守つていたのであつた。しかし至正二十一年八月、朱元璋が江州（九江）を攻陥させ、友諒を武昌へ逐うと、その年十二月、胡廷瑞は自ら使者を派して款を通じ、翌年正月には平章祝宗等とともに南昌を以つて元璋に降つたのである。

友諒の統制から自立したもう一人の有力者は熊天瑞^⑪である。彼は初め徐壽輝に従つていたが、後陳友諒の命を受け吉安、贛州等江西の南部各地を攻略し、贛州を根據にして自立的勢力となつた。彼は自ら「金紫光祿大夫、司徒、平章軍國重事」と稱え、友諒の節制を受入れなかったという。彼はその後數年、贛州を中心に江西、廣東省境地帶で自立的勢力として活動したが、後朱元璋に降つた。

以上のように見て來るならば、江西と安徽南部地域の有力者の殆んどが陳友諒の支配下に十分組み込まれていなかった

といわざるを得ないであろう。殊に白蓮教徒勢力は陳友諒に潰されたり、離反する傾向を強く持ったため、友諒は鄒普勝を漢國の指導者に据えたものの、教徒勢力を殆んど把握することができなかったと考えられる。しかも鄒普勝の働きは、漢國においては殆んど現れなくなってしまうのである。従って第一節で述べたように白蓮教徒勢力の活動の最も激しかったと考えられる江西、安徽南部地域では、陳友諒の支配力は十分浸透せず、不安定なままにとどまらざるを得なかったものと考えられるのである。その弱點を朱元璋軍に衝かれ、江西地域における主導力を奪われた結果が、至正二十三年八月の鄱陽湖における決定的敗北となったものと考えられるのである。

四

それでは最後まで漢國を支える基盤となったのは如何なる勢力であったのだろうか。次にその點について考えてみたい。

陳友諒を支えた力を人的な面から見ると、漢國成立に當って、陳友諒が丞相とした張必先と太尉の張定邊をまず上げなくてはならないだろう。この二人は鄱陽湖における朱軍との戦いでも大活躍をしたし、友諒亡き後も子の陳理を盛り立てて漢國の存續を計ったことは既に述べた所である。

この外に、漢國においてはもう一つの人脈があった。それは陳友諒自身の兄弟や姻戚關係の人物である。明史の陳友諒傳(卷二三)等によれば、彼には友富、友直という二人の兄、友仁、友貴という二人の弟があった。この中、二人の兄がどの様に友諒に協力したかは不明なのだが、二人の弟は良き協力者であつたらしい。特に友仁は「五王」と呼ばれ、智略があり、善戦を以って有名であつた。また陳普略なる人物は友諒の叔父に當るらしいが、彼も漢國の平章として友諒の協力者であつた。そして友仁、友貴、普略の三人は共に鄱陽湖の戦いで戦死をとげたのである。

更に友諒の兄弟でもう一人重要な人物は、兄の陳友才なる人物である。尤もこの人物は明史の傳等には名が上がつてい

ないのであるが、明實錄卷十四、甲辰（至正二十四年）二月癸丑の條に、陳瑄が張定邊等を率いて、武昌において朱元璋に降ったことを述べた後に、

故陳友諒兄友才降。友才所謂二王者是也。始以友諒命與左丞王忠信守潭州（長沙縣）。

と記されており、友才なる兄がいたことは事實のようである^⑧。また第一節に引いた嘉靖長沙府志卷一、沿革の條にも、

僞漢將陳友才據潭州。

とあり、この後文には、

明太祖以甲辰三月。伐漢陳瑄降。陳友才以長沙。益陽寨長王忠信以善化。黃寧以瀏陽。易華以醴陵。王崇德以攸。譚悅道以茶陵。劉玉以湘潭。吳仁崇以湘陰。賀興隆以安化。李祥以寧鄉。咸來歸附。

と記されており、陳友才の存在は俄には否定し難い。そして彼は陳友諒の二王として、湖南の要衝長沙を漢國の最後まで守っており、朱元璋軍に抵抗する姿勢をも示していた。

湖南におけるもう一人の有力者は前節で述べた潞張、即ち張必先である。彼は岳州を據點にしていたことは既に指摘したが、康熙華容縣志卷一、山水の條によれば、次のような興味ある記事が見出される。

有潞張城。〈陳氏參政張雄所築。……張始從倪文俊。後爲陳氏守岳州〉僞漢之所儲粟地也。へゝ内は割注。

ここに言う張雄は明らかに張必先の間違いで、岳州所屬下の華容縣には「潞張城」と呼ばれた城があり、しかも漢國の儲粟の地であつたとされている。前引の嘉靖長沙府志の記事とも考え合わせれば、張必先の守る岳州と、陳友才の守る長沙を中心にして、湖南の主要地域は確實に陳友諒の支配下に組み込まれていたということができよう。明實錄卷十五、甲辰（至正二十四年）八月乙未の條には次のような記事がある。これは漢國が減んだ直後、朱元璋が徐達に湖南各地を按行するよう命じたことを記した文であるが、

上諭（徐）達曰。今武昌既平。湖南列郡。相繼款附。然其間多陳氏部曲。觀望自疑。亦有山寨遺孽。憑恃險阻。聚衆殲

民。今命爾按行其地。當撫輯招徠。俾各安生業。或有恃險爲盜者。卽以兵除之。毋遺民患也。

と述べられている。漢國が減んだ後も、湖南地域では、なお山寨等の險に據って、朱元璋支配に抵抗しようとする陳友諒の殘存勢力が多く存在したことを朱元璋自身が認めているのである。湖南は陳友諒にとって最も重要な地盤であったといえよう。

湖南と並んで湖北も陳の重要な地盤であったことは、彼が沔陽の出身であったことから考えても當然であった。陳の平章姜玘なる人物は江陵（湖北省）を守っていたし、楊以德なる人物は夷陵（彝陵）を守り、楊興なる人物は歸州（秭歸縣）を守っていた。また沔陽を中心に、安陸、襄陽地域も陳の支配下に入っていた。明實錄卷十六、乙巳（至正二十五年）四月庚寅の條によれば

命平章常遇春。取湖廣襄陽諸郡。上常與徐達、遇春論襄陽形勢。謂曰。安陸、襄陽跨連荆蜀。乃南北之喉襟。英雄所必爭之地。今置不取。將貽後憂。況沔陽新附。城中人民多陳氏舊卒。壤地相鄰。易于扇動。譬人樹木。安陸、襄陽爲枝。沔陽爲幹。幹若有損。枝葉亦何有焉。今宜增兵守沔陽。而出師取安陸、襄陽。庶幾不失其宜。

と述べられており、沔陽は矢張り陳氏の出身地として、湖北支配の據點の一つであったことをうかがわせる。以上のように見てくるならば湖南、湖北地域が漢國の基本的地盤であったことは明らかであろう。

それではこの地域を地盤とした漢國支配には如何なる問題があつたのだろうか。その一つは、繰り返しになるが、陳友諒と白蓮教徒勢力との關係である。今まで見てきた所から明らかなように、漢國の有力支配者、或いは各地の支配者の中には殆んど白蓮教徒的色彩を持った人物が存在しないのである。二王の陳友才然り、五王の陳友仁然りである。むしろ陳友仁や張必先は善戦を以って有名であつたとすれば、彼等は武裝集團ないしは盜賊集團の指導者にふさわしい存在であつたのかも知れない。むしろ白蓮教徒であつたかも知れないのは、陳友諒の父の陳普才であり、また彼の叔父に當るらしい陳普略の二人である。この二人は、名に普字の附いていることから考えると、白蓮教徒とも考えられるのであり、陳友諒

はじめ他の兄弟達もその影響を受けたかも知れないのであるが、實際の行動の面では、彼等に白蓮教徒的色彩を看取することは全く不可能なのである。むしろ前節で述べたように、江西の白蓮教徒勢力は、陳友諒から離反する傾向が強かった點から考えても、陳友諒と彼の集團は白蓮教勢力とは無關係の存在になっていたと判斷される。しかし少くとも湖北が徐壽輝集團の活動の中心地域の一つであったことからすれば、陳友諒が徐氏集團の白蓮教徒勢力をその支配下に組入れることが出来なかつたことは、漢國の支配基盤に一つの弱點をもたらすことになつたものではなかつたらうか。漢國が長江中流域に廣大な支配範圍を持ちながら、江西、安徽南部地域にはその支配權を確立することが出来ず、また湖北においても支配基盤に弱點があつたとすれば、漢國の支配の基礎には脆弱な點が多く存在したことになるであらう。

しかし漢國の領域支配の脆弱性には、より基本的な問題があつたと考えられる。それは漢國の支配組織が陳友諒と各有力者との個人的な結び付きを基礎として成立つていたのではないかと考えられるからである。岳州を守つた張必先にしても、長沙の陳友才にしても、彼等はその地を據點とした自立的勢力であつた。湖南、湖北各地を守つた他の有力者にしても、その地域を支配する自立的勢力として先ず存在したのであり、陳友諒は彼等と個人的なある種の臣從關係を結ぶことによって自身の支配範圍を擴大したものと考えられる。漢國に明確な官僚體系を見出し得ないのはその爲ではなからうか。漢國には確かに丞相、太尉、平章、參政といった官職は存在したが、それらが何らかの組織的體系の下に各人に與えられたとは考えられない。陳友諒個人との結合の度合いの強弱によつて、それらの官位が個別に與えられた感が強く、組織的な官僚體制を目指したものとは考え難いのである。江西行省丞相という官職も胡廷瑞に與えられただけで、他の地域には見出すことができない。それに彼が朱元璋に降つた時、彼は陳友諒が授けた丞相以下の官、宣の印、及び軍民・糧儲の數を獻じたという。このことから判斷するならば、胡廷瑞は少くとも南昌を中心とした地域において、何らかの方法をもつて「軍民、糧儲の數」を把握していたと考えられるのだが、陳友諒がそれら各地域の軍民、糧儲の數を集權的に把握しようとした形跡は看取することができない。岳州管下の華容縣が、漢國の儲粟の地であつたこと、また長沙の湘鄉縣を守

つた易華なる人物が、陳友諒の爲に十萬八千餘石の糧米を送っていた^⑤といったことから考えても、各地の有力者が何らかの方法で兵員や糧米の徵發手段を有していたことは十分窺える。しかし陳友諒はそうした各地域の個別的支配の體制を中央集權的な體制に組織化する努力を實行しなかった。換言するならば、ある種の封建的な分權體制（元朝の中書省と行省との體制を模した如き）の上に、漢國の支配體制が成立していたと見なすことができるのではなからうか。これを朱元璋の領域支配の方法と比較するならば、漢國の支配體制の弱點はより明らかになると思われる。朱元璋は至正十六年二月、南京を攻略するや、まもなく江南行中書省を設置、ほぼ同時に江南行樞密院、提刑按察司を置いて江南支配に乗り出したのであったが、朱元璋の占領地支配に特徴的と見なされることは、文官官僚の重用である。このこと自體別に稿を改めて論じなくてはならないが、今その一例として婺州（金華府）の場合を上げたい。婺州、即ち金華府は浙東の要衝というので、朱元璋はここに江南分省を置き、宿將の胡大海を參知政事に任じて地方支配に當らせた。しかし民政の實際を擔當したのは郎中の王愷であった。明實錄の彼の傳（卷十、壬寅二月癸未）によれば、「民賦、軍器は威（王）愷に屬させた」と述べられており、軍事行動の指揮權は胡大海が持っていたが、軍器の調達や賦税の徵集等地方支配の基礎的事業には文官の王愷が當った。處州（浙江省麗水縣）の場合も耿再成が軍事指揮權を握り、都事孫炎が軍政、民政の實務を擔當した。「凡そ錢穀・兵馬の事は悉く之を委ねた」と實錄には記されている。南昌の場合も鄧愈が守將であり、知府葉琛がこれを補佐したのである。このように朱元璋は占領した各地域の要衝には必ずといっていいほど儒士出身の文官を派遣し、軍官による軍事的支配のみならず、文官官僚を通じての地方の土地、人民の把握を實行させている。元末のこの時期は、群雄抗爭の時期でもあったから、軍事的支配力が重視されたのは當然であったが、朱元璋はそれのみに止まらず、地方の支配には文官官僚を派遣し、彼等を通じて領域支配を安定化させていったと見ることができよう。換言するならば、文官官僚を通じて、朱元璋は自己の領域支配を中央集權的に組織化していったものと考えることができるとはなからうか。

以上のように考えるならば、陳氏の漢國の支配體制、即ち前に指摘したような分權的割據體制を乗り越えることが出来

なかった體制では、朱元璋の中央集權化を目指した組織的支配體制に、長期にわたって敵對することは不可能であつたろう。そうした意味で陳氏の漢國には基本的脆弱性が存在し、朱元璋との抗爭に破れ去つたのであつた。

註

① 徐壽輝集團の活動に關する從來の研究の主要なものには、吳晗『朱元璋傳』（一九七九年、三聯書店）第三章第一節。鈴木中正『中國史における革命と宗教』（一九七四年、東大出版會）第五章。重松俊章『宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒・白蓮教匪について（中）』（『史淵』一二六號、一九四一年）等がある。

② 彭瑩玉については前掲重松氏論文に詳論されており、吳晗の前掲書同節においても論じられている。

③ 名前に「普」字を冠することの意味については、鈴木中正氏前掲書第五章三節に指摘がある。

④ 明實錄卷八、庚子閏五月戊午の文では項普瑞となつてゐるが、これは項普略の誤りであらう。

⑤ この點については確定的なことは言えないのだが、今は吳晗前掲書八九頁註②の指摘に従つておきたい。

⑥ 萬曆休寧縣志卷一、輿地志沿革の年表、康熙徽州府志卷一、建置沿革表等參照。

⑦ 元史卷一四四、卜顏鐵木兒傳にその名があがっている。

⑧ 陳友諒については明實錄卷十三、癸卯八月壬戌の條の本傳。

⑨ 明史卷一二三の本傳。國初群雄略卷四、漢陳友諒。名山藏卷四四、天監記上等參照。

⑩ 陳友諒が強力な水軍を率いていたことは、例えば至正二十年

閏五月、太平から南京を攻撃した際に率いた軍容によつても十分に窺えよう。この時、陳友諒の率いた全軍の數は不明であるが、弟陳友仁（五王）が率いた船だけで千餘隻とされている。また朱元璋側に捕獲された「混江龍」等と命名された巨艦が百餘艘、戰舸（小型戰船）が數百隻とされている。（明實錄卷八、庚子閏五月庚申）

また南昌を攻撃した時には樓船數百艘、兵員六十萬を率いたとされている。（明史陳友諒傳、國初事蹟）

⑪ 元史卷一四三、余闕傳參照。

⑫ 明實錄卷八、庚子閏五月戊午の條。

⑬ 元史卷一九五、忠義三、全普菴撒里傳。

⑭ 註⑪同條。

⑮ 明實錄卷一四、甲辰二月辛亥の條。

⑯ 國初群雄略卷三所引の紀事錄參照。

⑰ 明實錄卷八、庚子閏五月庚申の條。

⑱ 丁普郎については獻徵錄卷六の傳參照。

⑲ 胡廷瑞については明史卷一二九、胡美傳。獻徵錄卷八、豫章侯胡美傳等參照。

⑳ 熊天瑞については明實錄卷一六、乙巳正月己巳の本傳、明史

卷一二三の傳等參照。

㉔ 陳普略が友諒の叔父に當るらしいことは、野口鐵郎氏の一九七八年度における東洋史研究會大會での報告、「元末明初の西系紅巾について」の史料に據った。明實錄卷十二、癸卯七月癸酉の條をも參照。

㉕ 黃彰健氏の明太祖實錄校勘記によれば、明史陳友諒傳、平漢錄等には友才なる者の名が無いとして、その實在に疑問を残しておられる。

㉖ 明實錄卷十五、甲辰九月甲申の條。

㉗ 明實錄卷十五、甲辰九月乙酉の條。

㉘ 明實錄卷十五、甲辰九月の條。

㉙ 筆者はかつて陳友諒が白蓮教徒とは見なし難いという見解を提示したことがある。「陳友諒の末裔について」(『中山八郎教授頌壽記念明清史論叢』、一九七七年)

㉚ 康熙長沙府志卷一五、藝文所收の湘鄉知縣南起鳳の「請齡墮糧詳文」に據る。この文の最初に

至明朝開國初。因易華助陳友諒米十萬八千斛。明太祖怒之。と記されている。

㉛ 明實錄卷十、壬寅二月丁亥の條。

㉜ 明實錄卷十一、壬寅二月癸亥の條。

附記

拙稿を東洋史研究編集部に提出直後、相田洋氏「紅巾考——中國に於ける民間武裝集團の傳統——」なる論文が本誌三八卷四號に掲載された。一讀、教えられる點が多く、拙稿と關係する部分も多いが、原稿に加筆する餘裕もないので、論點の究明には他日を期したい。

who was the main official of the prefecture; and this text is the one we are normally using today, the so-called “*Cheng-te* 正德-version” (Cheng-te is a yearperiod of the Ming 明); it will here be called the Jung Jong 7-version. In the middle of the 18th century it was printed for the first time using movable characters and because these characters are identical with those cast for the printing of the *Hyön Jong Sillok* (顯宗實錄), it is called the Hyön Jong Sillok-character-version. Since then, in modern times, there have been many editions published using movable characters, but as for old publications, only these three are known.

As for its circulation in the period, besides sometimes being mentioned in forewords etc. of history books which used this book (Kwön Kun 權近’s *Dongguk Saryak* 東國史略), only a few records are left. Further it is known that the Jung Jong 7-woodblock version was handed down until after the Im Jin 壬辰-war.

If we consider the Jung Jong 7-version which is the text normally used today, we see that it is a rather faithful reproduction of the version at the beginning of the Yi-dynasty, and we can further say that it is near the one of the Koryŏ-period. And so, notwithstanding the fact that as a text it is a new one, its form goes back to the Koryŏ-period, and it is, as was believed up until now, the best text available at present.

On the Ta-han 大漢 State of Ch'en Yu-liang 陳友諒

TANIGUCHI Kikuo

It is a commonly known fact that Ch'en Yu-liang 陳友諒 was a powerful warlord at the end of the Yuan, and that he fought for hegemony with Chu Yuan-chang 朱元璋. However, as for his activities, studies so far are not going far outside the scope described in his biography in the Ming History (*Ming-shih* 明史), and especially concerning the base of his activities one can say that there are hardly any studies investigating that. This article focuses at the same time on his activities and on understanding the bases which supported them, and it has as its final purpose to make clear the reasons why Ch'en Yu-liang couldn't but be

beaten by Chu Yuan-chang.

This article presents first the activities of the White Lotus-sect of Hsü Shou-hui 徐壽輝, that is the so-called Hsü-group, of which Ch'en Yu-liang himself was a member. In the activities of this group are conspicuous those of a sub-group of people to whose name was attached the character *p'u* 普, for instance Tsou P'u-sheng 鄒普勝 and Hsiang P'u-lüeh 項普略. This group is considered as being the original group of White Lotus-sect adherents. Outside this group was the one formed by the combination of the "water-bandits" (*shui-tsei* 水賊), armed groups as for instance represented by Ni Wen-chün 倪文俊, and the groups of local bullies, and this is considered the Hsü-group.

The one who usurped the "water-army" of Ni Wen-chün, which was the most powerful military force within this Hsü-group, was Ch'en Yu-liang, and with this water-army as his base, and by overthrowing Hsü Shou-hui, he founded the Han-state (*Han-kuo* 漢國).

But Ch'en Yu-liang, who held power on the basis of military force, i. e. the "water-army", started to have a big disadvantage just because of this. His murder of Hsü Shou-hui by force, along with the fact that he probably wasn't considered to be a believer of the White Lotus-sect, brought about the alienation of the White Lotus-sect forces, and he wasn't able to incorporate these forces under the control of the Han-state. Furthermore, the group that supported him consisted of his brothers and the powerful persons in military groups such as Chang Pi-hsien 張必先; but they existed as local independent centrifugal forces, and it was not possible to create a strong centralized system around Ch'en Yu-liang. For this reason, one can conclude that Ch'en Yu-liang's Han-state had a fundamental weakness compared with the government of Chu Yuan-chang, who gradually created a strong centralized system, liberally using scholar officials.